

プロフィール

助産師として病院勤務後、英国にて公衆衛生学修士号 (MPH) 取得。その後 UNICEF ケニア事務所保健課にてインターン及び短期コンサルタントとして勤務。海外実務研修では国際移住機関 (IOM) ハイチ事務所において国内避難民キャンプにおけるコレラ対策等の公衆衛生事業に従事。現在は JPO 派遣制度により、UNICEF タンザニア事務所保健栄養課にて保健オフィサーとして勤務。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

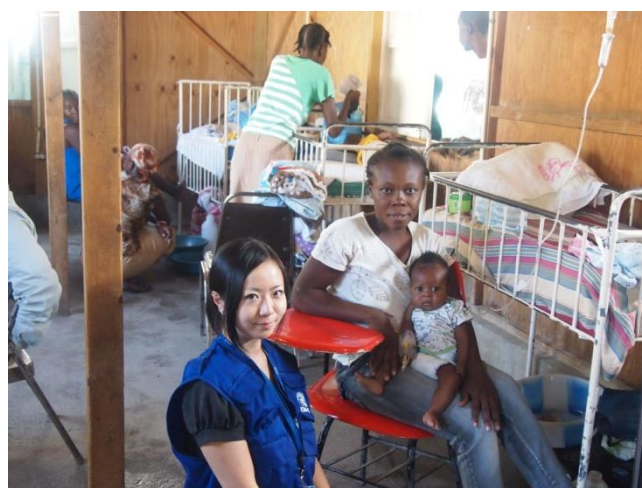
海外実務研修で現場経験を積むことが第一の目的でした。また私は保健分野に特化した経歴を積んできたため、視野を広げ平和構築についても学びたいということも理由の一つでした。紛争や災害時の緊急/復興支援において、他のセクターと協働しながら保健分野の専門性を活かしていかに貢献できるか、そのヒントを掴みたいと考えました。

2. 国内研修の感想は？

アジア各国からの参加者を含め多様な専門性と現場経験を持つ仲間たちと共有した学びは、掛け替えのない財産になりました。経験豊富な講師陣の知見を聴くことは刺激になり、「クラスルームの中であっても知識を学ぶのではなく、実体験として“経験”をしてほしい」という講師陣のメッセージの通り、緊急支援時の多機関による調整のシミュレーションなど、今でも忘れず実務に活かすことのできる学びを得ました。HPC を通じて一生の友達と思える仲間に出逢うことができ、今も強いつながりを続けられていることに感謝しています。

3. 海外実務研修での活動内容・感想を教えてください。

ハイチでは 2010 年 1 月の震災、同年 10 月のコレラ発生による深刻な被害があり、3 年経過後も約 32 万人が国内避難民キャンプで生活し (2013 年 3 月当時)、劣悪な衛生環境によりコレラの再燃を繰り返していました。IOM はハイチ保健省と協働し、住民の保健ニーズに応え公衆衛生状況を改善するための支援を行ってきました。主な活動としては、①コレラ対策 (初期治療、医療機関への搬送、コミュニティヘルスワーカーの育成、啓発活動等)、②地域への再定住支援 (医療ニーズ査定と医療機関への紹介)、③社会心理的サポート (精神疾患患者や性的暴行の被害者へのケア) の 3 つがあります。



【首都ポルトープランスの大学病院の小児科病棟にて、入院中の子どもと母親と共に】



【小児科病棟の視察と物資配布時、入院中の子どもと共に】

私は主にコレラ対策を担当し、データ分析とキャンプでの患者調査や啓発活動等のモニタリングとサポートを行いました。また保健部門の国際職員はチーフと私だけだった為、事業企画書・ドナー報告書の作成や現地職員への指導など多様な管理業務に関わり、UNV とはいってもシニアマネジメント会議への出席やチーフ不在時に Officer in Charge (OIC) を務めるなどの機会に恵まれました。特に印象深かったのは、任期中に二度ハリケーンに対する緊急支援に関わったことです。キャンプの住民にとって雨風は脅威になり、不衛生な環境に雨が降り続くことによりコレラ等感染症の

リスクも高まります。これを防ぐために IOM は事前に各キャンプをまわり、物品配布や衛生教育を含む啓発活動を行いました。ハリケーン当日の早朝には、各部署と連携し住民の避難所への避難を行い、特に支援が必要な妊産婦、乳幼児、高齢者等のニーズ査定とケアを行いました。私は主に現場からの情報を報告書にまとめ他部門との調整を行う役割を担いました。緊急時には現場での活動だけでなく、それを支える裏方業務も必要です。資金調達や他機関との調整のために正確なデータをタイムリーに追い続けることが必要ですが、悪天候で通信事情も悪い中で現場スタッフへの負担を最小限に抑えつつも必要な情報を効率的に収集できるよう、明確な指示出しと現場との密な連携を図ることの重要性を学びました。



【コレラの初期治療設備の視察時、キャンプに住む子ども、IOM 現地職員とコミュニティヘルスワーカーと共に】



【コレラ対策プロジェクトにより初期治療を受けた女性】

支援を通して感じたことは、現地の人々の中に答えはあるということです。持続的な保健システム構築を目指しながらも、保健省のキャンペーン不足、援助依存、大雨の度に再燃するコレラなどの現実を前に、データ分析などの地道な作業を続けていく中で無力感を感じることもありました。しかしある時、妊娠中にコレラに罹り IOM の支援するコミュニティヘルスワーカーと病院との迅速な連携により入院先で無事出産した女性に話を聴く機会がありました。赤ちゃんを抱いて笑顔を向けてくれた女性の力強さと、



【世界手洗いの日にキャンプの子どもたちに手洗い指導を行う IOM 看護師】

誇らしげに当時の状況を話してくれたコミュニティヘルスワーカーの表情は今でも忘れられません。このように彼ら自身が困難を乗り越え、また目の前の助けを必要とする誰かの現実を少しでも変えることができたという実感を得ることの積み重ねが、一人一人の自信と責任感に、さらには将来的に現地の人材が自らの力で保健医療を担うことのできる日につながるように感じました。それは私自身、微力ながらもその過程の一端を担うことの意味を感じた瞬間でした。彼らのような現場の声をプロジェクトに反映すること、またこちらからも彼らに対しフィードバックを返し人間対人間の相互作用を続けることが、現場との信頼関係の構築に、延いてはプロジェクトの効率・効果を最大限にすることにつながることを実感しました。

4. 就職先での活動について教えてください。

UNICEF タンザニア事務所の保健プログラムには、母子保健、予防接種、地域保健、HIV 母子感染予防の 4 つの構成要素があります。私の主な仕事は以下の 6 つです：①政府の母子保健政策・戦略の評価・改善、各種ガイドライン等の見直しに対する技術支援と他機関との調整、②母子死亡症例検討プロジェクトの現状調査と実施支援、③母子保健サービスの行き届いていない母子のマッピングと要因調査、④予防接種プロジェクト運営管理の補佐、⑤保健栄養課の M&E 及び知識共有担当として、状況分析・中間評価・年間計画作成等に必要なデータ/情報をまとめる、⑥その他企画書やドナー報告書の作成等。

タンザニアは政治的にも安定しており、予防接種プログラム等の成功から 5 歳以下の子どもの死亡率低下は目覚しく、ミレニアム開発目標 (MDGs) 5 の達成も見込まれています。その一方で、新生児死亡率の低下は遅々としており、母体死亡率の改善にいたっては MDG 達成まで遙か遠い状況です。また国全体の予防接種率はアフリカ諸国に比べ高いとはいえ、毎年行き届かない子どもたちがいます。この最も支援が届きにくい環境にある母子にいかにサービスを届かせるか、この“equity”という視点が焦点になります。UNICEF の活動において、Upstream(政策レベルの活動)と Downstream(より現場に近い活動)両者のバランスが重要です。政策レベルではより現場のニーズと優先順位に即した効果的な計画立案に向けてアドボカシーを行い、また Downstream としては指標の悪い地方地域に焦点を当てて事務所全体で協働し活動を行っています。

5. 就職先での感想は？一番印象に残っていることは？

政策レベルで仕事をする人が多いですが、保健省やパートナー機関の人々も医療関係者等が多く、彼らの現場の現状を反映した発言には説得力があり、はっとさせられることも多いです。印象に残っているのは、各州で四半期毎に行われる母子死亡症例検討会に出席する為に地方出張した時のことです。これは出産時前後に適切な医療ケアを受けられないことにより亡くなった母児の症例を検討し、その原因を追究し同じことを繰り返さないよう体系とケアの質の改善を図る取り組みです。特に母親の死亡は残された子どもたちの生存率及び心理社会的な成長に大きな影響を及ぼすことが研究からも明らかになっています。この会議の合間を縫って、私は現地医療機関の視察も自主的に計画し、医療従事者に話を聴きました。現場の医師・助産師たちからは、命の誕生であるはずの瞬間に命を落とさなければならない状況に立ち会うことが彼らにとっても多大なストレスになっていることが如実に語られました。また現地でも珍しい男性助産師にも会いましたが、彼が助産師を志したのは医療者が産婦さんたちに酷い態度で接しているのを見てこの状況を変えたいと思ったからだと言ってくれました。このように現地の人々自身が現状を良くしたいと思うところから変化は始まること、彼らが未来を変えていけるようサポートしていくことが私たちの役割であることを改めて感じました。

6. 今後のキャリア・プランを教えてください。

今後も UNICEF/国際機関において母子保健プロジェクトの運営管理に携わり、全ての母と子が必要なケアを受けることができる世界を目指して微力ながらも尽力していきたいと考えています。また長期的には母子保健分野での社会起業にも関心があり、保健政策の博士課程に進み学びを深めたいとも考えています。

7. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

この業界に決まったキャリアパスはなく、不安定な就職活動も続き、キャリア/ライフプラン両面で常に模索は続きます。思い描くような仕事が現場ですぐできる訳でもなく、葛藤や迷いも多いです。その中で指針になるのは、なぜこの仕事をしたいのか、さらに突き詰めれば何のために生き何を変えたいのか、その想いの原点であると思います。私の場合は幼い頃に母親を病気で亡くした経験から、母と子そして家族皆が当たり前のように一緒に暮らせる世界の実現に向けて自分の人生を使うことをミッションと考えてきました。人は思い描く場所に向かっていくもの、思い続ければ必ず道は開けるものだと思います。平和構築というと大きなテーマですが、それは平和学や紛争解決学の専門家だけでなく、様々な専門性を持つ人々が一緒に考え働くことで実現に近づけることを、平和構築人材育成事業を通して学びました。この研修を通して得られる現場経験と、同じ志を持つ仲間との出逢いは、皆さんが目指す場所へ向かって前進する過程で一つの架け橋になってくれることと思います。

(了)